



第2章 本事業（ECCELL）2012年度の活動実績

1. 授業改革 1・学部授業を中心に

1) 生活科学部 発達臨床心理学講座を中心とした授業改革

(1) 発達臨床心理学講座専門授業における試み

発達臨床心理学講座の保育系実習・演習科目（2012年） ●は必修科目、▲は準必修科目

1年次	2年次	3年次
●発達臨床基礎論Ⅱ（前期） ⇒①	●発達臨床観察法（前期） ⇒②	●発達臨床学特別実習Ⅱ （インターンシップ・通年）⇒④
●発達臨床基礎演習Ⅱ（後期） ⇒①	▲保育臨床実習（後期） ⇒③	

各授業の主題と目的

①発達臨床基礎論Ⅱ 浜口順子・菊地知子

発達臨床基礎演習Ⅱ 柴坂寿子・菊地知子

子ども学、保育学への入門的授業。子どもの育つ場への参加、子どもをイメージできる場面設定などによって、体験的対話的に、大人と子どもの関係について考え、自然環境、人的環境、さらには歴史、社会、文化、生物全体といった多角的な視座での人間理解をめざす。

②発達臨床観察法 柴坂寿子

生活の場での行動観察に慣れると共に、経験に基づいて、行動観察という方法の利点と限界、実行上の留意点について考える。

③保育臨床実習 浜口順子・刑部育子・安治陽子

附属幼稚園、いずみナーサリーにおいて観察実習をおこない、保育の現場の雰囲気を知り、子どもの行動や遊び、保育者の保育行為、保育環境について、観察をとおして実感的に学ぶ。また、観察後はディスカッションや記録の記述による省察作業にすすむ。

④発達臨床学特別実習Ⅱ（インターンシップ） 刑部育子・浜口順子・安治陽子

文京区公立幼稚園、私立養護学校、附属幼稚園、いずみナーサリーなどをフィールドにして、1年間定期的に参加実習を行い、子ども理解、保育理解、教育方法などについて実践的に学ぶ。

(2) 教職関連科目との共同

① 保育内容研究Ⅰ 言葉 内藤知美

② 保育内容研究Ⅱ 人間関係 向山陽子

③ 保育内容研究Ⅲ 環境 岸井慶子

④ 保育実践論 伊藤葉子

⑤ 保育指導法Ⅱ 宮里暁美

⑥ 保育表現Ⅰ（指導法） 辰巳豊

(3) 授業におけるゲスト講師との協働（講演・ワークショップ・ディスカッション・実演）

① 佐藤キミ男氏（板橋区こどもあそびばプロジェクト代表）による身体表現ワークショップおよび講義（「発達臨床基礎論Ⅱ」）

② 徳岡久枝氏（愛育養護学校教頭）による特別講義（「発達臨床基礎論Ⅱ」）

③ 松居友氏（フィリピン・ミンダナオ子ども図書館館長）による特別講義（「発達臨床基

礎演習Ⅱ」)

- ④ 附属幼稚園およびいずみナーサリー保育者とのディスカッション（「保育臨床実習」）

2) 自主ゼミ

(1) 子ども社会学研究会

子どもの登場する映画を観る時間を共有、時に情報提供をし、感想や意見を自由に出し合う。そのような緩やかな在り方を維持することで、参加者それぞれが一人ひとり独自の問題意識を確認し、その後の実践や研究に自由につなげていくことができよう。場を共有しつつ参加者の思考や判断の独自性・創造性を許容することで、学びの幅がひろく自由度の高い研究会たりえているのではないかと考える。

第1回(第18回) 6月14日(木) 『原爆の子』 監督 新藤兼人

第2回(第19回) 10月22日(月) 『レディバード・レディバード』 監督ケン・ローチ

(2) 絵本ゼミ

絵本を媒介に参加者が自らの研究テーマや生活について自由に語り合い意見交換を行う緩やかな会。今年度は、主に学部卒業年度生と共に5回程度開催。

2. 授業改革2・社会人プログラム

ECCELL 社会人プログラムでは、幼稚園教諭、保育士などの現職者をはじめ、子どもに関わるすべての社会人を対象として、生活科学部に特別設置科目を開設し、豊かな保育や子育てを実現できるよう、学びなおしの機会を提供している。社会人受講生は、本学の科目等履修生として登録され、一定の条件を満たせば生活科学部で単位が認定される。開講時間は、社会人に合わせて夜間(18:20-19:50)となっており、科目によっては集中講義で開講されるものもある。カリキュラムは、2年間で1サイクルとして構成されているが、24年度はその3年目に当たる。子育て支援や発達障害など現代的な課題性の高いものを新規科目として追加し、カリキュラムの充実を図った。

1) 開講科目・履修状況

24年度の開講科目および履修人数は【表1】のとおりである。前学期の社会人履修者は38名であった(出願者は39名、うち1名は後日履修を取り下げた)。出願者39名の内訳は、22年度および23年度からの継続履修者が19名、ECCELL 社会人プログラムへの出願は初め

てという方が 20 名であった。新規出願者 20 名のうち 3 名は男性であり、23 年度後学期から出願資格の拡大を図り、男性の受講が可能となって以来、本プログラムにおいて初めての男性受講生を迎えての開講となった。後学期の出願者は 38 名、うち 27 名（男性 2 名を含む）は前学期からの継続履修者であるが、初めての出願者も 11 名を数えた。

23 年度の履修者実数は、前後期とも 27 名であったのに比べ、24 年度（前後期とも 38 名）は 1.4 倍の人数となり、着実に受講生数が増加してきた。社会人プログラムの取り組みが認知され始め、社会人の学び直しのニーズに応える活動への一定の評価が得られてきたと考えられる。今後さらにカリキュラムや講座運営の改善を図っていきたい。

表 1 24 年度 ECCELL 社会人プログラム開講科目別 履修・聴講人数

科目名	学期	曜日	単位	担当	社会人履修生 (うち聴講生)	学部生	聴講のみ	合計
コミュニティ保育資源の活用Ⅰ	前	火	2	築地 律	1	1	2	4
コミュニティ保育資源の活用Ⅱ	後	火	2	多田 千尋	4(1)	1	0	5
乳幼児発達障害論Ⅰ	前	水	2	榊原 洋一	13(2)	3	1	17
乳幼児発達障害論Ⅱ	後	水	2	榊原 洋一	10(2)	0	0	10
現代保育課題研究Ⅲ*	前	木	1	榊原 洋一	10	2	0	12
現代保育課題研究Ⅳ*	後	木	1	浜口 順子	10	0	1	11
子ども理解と保育の探求Ⅰ	前	金	2	菊地 知子	11	18	2	31
子ども理解と保育の探求Ⅱ	後	金	2	菊地 知子	4	4	10	18
乳幼児保育マネージメントⅠ	前期集中	7/25-28	2	安治 陽子	7(1)	4	3	14
乳幼児保育マネージメントⅡ	後期集中	12/15,16 1/5,1/6	2	安治 陽子	14(2)	2	0	16
現代育児論*	前期集中	7/30 7/31 9/29	1	小西 行郎 汐見 稔幸 大日向雅美	17	7	4	28
比較保育実践研究Ⅱ	後期集中	1/12,13, 2/2	1	星 三和子	10	1	4	15
のべ受講生数	前				59			
	後				52			
受講生実数	前				38(1)			
	後				38(2)			
一人あたり受講科目数 平均	前				1.51			
	後				1.37			

*新規開設科目

23年度に比べて集中講義の開講科目数が増えた（2科目→4科目）が、24年度は集中講義のみ履修する受講生が複数みられた。その中には遠方（富山、鳥取など）からの受講生もいた。集中講義は、毎週夜間授業に参加することが難しい社会人にとって、その学びのニーズに応える機会となることが示された。来年度以降も、集中講義での開講科目を用意していきたい。

社会人履修生の職業について、【表2】に示した。幼稚園や保育園、子育て支援や療育の現場などで子どもに関わっている現職者は約6割であり、その他さまざまな職業を持った人が集まっている。会社員や家庭人など、保育の現場で子どもと関わっていない人も約15%を占めているが、現在は会社員や主婦であっても、保育や教育の現場にいた経験のある離職者であったり、今後の個人的あるいは社会的な活動において、子どもに携わる計画や意思を持っている方が多く、社会人プログラムでの学びを、履修者それぞれの形で今後の実践に生かしていこうとする意図が感じられる。

学部生の履修や大学院生・研究生の聴講については、合わせて【表1】を参照されたい。夜間授業として開講される科目が多く、集中講義も週末や夜間であるため、学部学生にとっては出席しにくいと思われるが、履修手続きが社会人に比して容易であるため、周知の方法によっては今後履修、聴講が増えることも期待できよう。社会人プログラムが、社会人と学生が相互に学び合う場としても、さらに有機的に機能していくように工夫をしていきたい。

表2 24年度 社会人履修生の職業・最終学歴

		前学期	後学期
職業・勤務先	保育所	13	10
	幼稚園	8(9)	9
	子育て支援	3	4
	療育・心理	2	2
	小学校	2	1
	中学校・高校	0	1
	専門学校	0	1
	児童福祉施設	0	1
	会社員	3	2
	学生	0	0
	フリーランス(編集者・デザイナー)	4	3
	無記入(家庭)	3	4
最終学歴	高等学校	0	0
	専門・専修学校	7	7
	短期大学	13(14)	8
	四年制大学	16	21
	大学院	2	2
合計(人)		38(39)*	38

* () は履修許可数 (→取り下げにより実数は1名減)

2) 出願要項の改訂

ECCELL 社会人プログラムでは、22年度から24年度にかけて、これまで年2回ずつ、計6回の受講生募集を行ってきたが、特に社会人の方からは、出願手続きの簡略化や出願資格の拡大を求める声を多くいただいている。それらの声をまとめ、出願や履修に際しての利便性を考慮して、大学教務チームとの協議を行っている。以下(1)～(4)は23年度までの成果の概要、(5)は24年度からの変更点、(6)は25年度からの変更が内定している点である。

(1) 出願資格の拡大

社会人プログラムの趣旨として「子どもに関わるすべての社会人を対象とする」ことを掲げており、協議の結果、23年度後学期から男性の受講を可能にした。

(2) 出願書類の簡略化

最終出身校の卒業(修了)証明書、成績証明書の提出について、毎年度提出が求められていたが、(前・後学期少なくとも一方を)継続して登録している場合は不要となった。

健康診断書については、所属機関で受診した1年以内の診断書の提出が認められることとなり、現職者にとっては負担が軽減された。

さらに、後学期の出願書類は入学願書のみでよいこと、検定料や入学料はかからないことを出願要項に明記した。

(3) 入学願書記載事項の追加

入学願書自体の改訂は認められなかったが、「願書記載注意事項」として、以下①～③の内容を満たすよう注意を喚起することとなった。

- ①「履修の目的」を各科目について記載する。
- ②履歴欄に職歴を記載する。
- ③勤務先名称を記入する。

(4) 入学料の有効期間の緩和

入学料については、出願要項に「特別設置科目のみ履修し継続して登録する場合は、2年目から2年間は免除。」と記載されている。「継続して登録」という文言の意味について誤解が生じることのないよう、「每学期継続して登録」と改訂し明記した。この点に関しては、24年度にも大学教務チームと協議を行った。社会人が職業生活と両立させながら学ぶことを考えると、「每学期継続」ではなく「毎年度継続(前学期後学期の少なくとも一方)」で入学料が免除となるよう、今後も受講生の実態を説明しつつ理解を求めていきたい。

(5) 聴講生の受け入れ

過去に単位取得した既履修科目について、再度授業を受けたいとの申し出が複数あったため、24年度から聴講生として受け入れることが認められた。科目等履修生制度においては、ECCELL 社会人プログラムの実態に合わせて、上記のような規定変更の努力を重ねてきたが、聴講制度においては既存の大学全体の規定に従っている。そのため、男性の聴講ができない、日本国籍でなければならないなど、ECCELL 社会人プログラムとしては科目等履修生制度と聴講制度の整合性が十分でない状態となっている。この点については24年度にも大学教務チームと協議を行ったが、今後も引き続き検討を行っていききたい。

(6) 出願書類の追加

上記(3)において、入学願書の「履修の目的」欄の記載について出願要項に注意書きを追加したが、25年度からは「履修の目的」を記載する用紙を別紙として用意し、600字程度の記述を求めることになった。事前に指導教官と面接することが前提となっている他の科目等履修生出願者と異なり、社会人プログラムでは出願時には授業を担当する教員と面識がなく、履修可否の判定において、出願者の学習動機や学びのニーズは「履修の目的」欄の記載内容で判断するしかない。各科目について、出願者の動機やニーズを的確に把握し、妥当性と信頼性の高い判定につなげること、またそれらを事前に各担当教員に伝え、授業内容への反映も考慮していただくことで、教授学習効果の増大を図ることが目的である。

3) 免許法認定公開講座に向けての取り組み

ECCELL 社会人プログラムの各科目について、文部科学省に教育職員免許法認定公開講座の認定申請を行うこととなり、25年度前学期からの講座開講を目指して準備を進めている。申請が認められれば、幼稚園教諭二種免許状を有する受講生が修得した単位は、幼稚園教諭一種免許状への上進の認定に使用できるようになる。

幼稚園教諭免許状については、短大レベルで養成される二種免許状を有する人が多いという現状があるが、諸外国においても幼児教育の資格の高度化が進められており、我が国においても同様の社会的要請がある。幼保一元化の流れの中、幼児教育・保育の資格の統合やその専門性の一層の研鑽が求められており、幼稚園教諭一種免許状の取得は今後さらに高いニーズが生まれるものと予想される。社会人プログラムでは、充実したカリキュラムの提供を通して、一種免許状への上進のための学習の場としても機能していきたいと考えている。その実施主体として、科目の調整、事務手続きの確認、既成システムとの整合などについて議論し、大学との協議を重ねている。

3. 研究発表

1) 論文

- ① 浜口順子 (2012) 乳幼児教育環境の創造プロセスにおける「水平—垂直」のモチーフ—お茶の水女子大学附属いずみナーサリーの保育カリキュラム生成—, 人文科学研究 8, お茶の水女子大学, 171-181.
- ② 浜口順子 (2012) 人と関わりながら自分と出会うこと, 幼稚園じほう 40 (6) 全国国公立幼稚園長会, pp. 12-18.
- ③ 浜口順子 (2012) 編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック (1) —「乗物の巻」を読む—, 幼児の教育 111-2, フレーベル館, 50-55.
- ④ 浜口順子 (2012) 編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック (2) —明治・大正の絵雑誌からキンダーブックへ—, 幼児の教育 111-3, フレーベル館, 51-55.
- ⑤ 浜口順子 (2012) 編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック (3) —昭和初期の幼稚園を映すテクニスト—, 幼児の教育 111-4, フレーベル館, 50-55.
- ⑥ 浜口順子 (2012) 編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック (4) —ツーリズムへのいざない〜地球が小さくなり始めた時代〜—, 幼児の教育 112-1, フレーベル館, 49-54.
- ⑦ 浜口順子 (2012) 編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック (5) —生活と知をつなぐ芸術性—, 幼児の教育 112-1, フレーベル館, 掲載予定.
- ⑧ 菊地知子 (2012) 「いのちはみんなつながっている〜知識より知恵を」本橋成一氏講演, 幼児の教育 111-1, フレーベル館, 56 - 61
- ⑨ 菊地知子 (2012) 忘れない! 明日へ共に—東日本大震災と保育, ひとなる書房, 87-95
- ⑩ 菊地知子 (2012) こどもももももものうち 現代と保育 84号, ひとなる書房, 106-107

2) 学会発表

- ① 菊地知子 (2012) 「いのちを守る日常的営為」として見つめ直す保育のありよう—東日本大震災に端を発する HITOHADA プロジェクト等の取り組みから考える— 日本保育学会第65回大会口頭発表
- ② 佐藤キミ男、児玉理沙、菊地知子、佐藤寛子 (2012) 一人ひとりが多様に生きられる子どもの居場所についての一考察 日本保育学会第65回大会ポスター発表
- ③ 菊地知子、河野優子、新開よしみ、柳瀬洋美 (2012) HITOHADA プロジェクトの現在〜「えがおはじけてショウタイム」等の活動から見えてきたこと〜 こども環境学会 2012年仙台

大会ポスター発表

- ④ 菊地知子 (2012) 特別課題研究「大震災と教育」 「乳幼児保護者の語り合いから考える：居留・避難、つながり、未来へのまなざし～「食べる・寝る・笑い合うから考える子ども目線の復興をめざして」 日本教育学会第 71 回大会課題研究シンポジウム
- ⑤ 菊地知子 浜口順子 安治陽子 (2013) 「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築事業」の現在①—発達臨床基礎論Ⅱ・発達臨床基礎演習Ⅱを通して“総合的保育者”養成を考える— 日本保育学会第 66 回大会論文集（掲載予定）
- ⑥ 安治陽子 浜口順子 菊地知子 (2013) 「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築事業」の現在②—保育リカレント講座「ECCELL 社会人プログラム」の展開 — 日本保育学会第 66 回大会論文集（掲載予定）

4. 学内連携

1) 附属園との共同研究

附属幼稚園とは、2月の公開保育研究会におけるクラス別検討会のファシリテータ、協議会における検討会のまとめ発表などにおいて連携協力を行った。また園内研修にも年に数回参加し、記録作業に協力した。

附属いずみナーサリーとは、隔月1回程度の研究会を行い、カリキュラム研究、表現遊び、遊具開発、室内遊具の開発等において、共同して研究を行った。

2) COSMOS・いずみナーサリー共催イベント

11月に「子どもの世界をのぞいてみよう ～いずみナーサリーの子どもたちと触れ合ってみよう！～」が開催され、18名の教職員及び学生の参加があった。男女共同参画関連事業を推進している「リーダーシップ養成教育研究センターCOSMOS」、学内保育所「いずみナーサリー」と連携し、本学に所属する学生や教職員を対象に、子どもと接することの楽しさを実感し、子どもという存在について考えるというイベントであった。ECCELLは事前レクチャーを主に担当した。

3) 雑誌『幼児の教育』の企画・論稿掲載

『幼児の教育』誌は、本学がその前身東京女子高等師範学校であった時代の1901年（明治34年）以来、幼児教育・保育研究者と附属幼稚園が共同して発行し続けてきた（当初は『婦人と子ども』）月刊誌であったが、110年目にあたる2011（平成23）年に4月から季刊化した。そのリニューアル企画、編集方針、内容の検討をフレーベル館と協力して進めた。

同誌へのECCELLメンバーからの論稿投稿も行った（表参照）。

表 『幼児の教育』執筆一覧 第111巻（2012）春号～第112巻（2013）冬号

巻・号	タイトル	執筆者
第111巻第2号 （春号）p.2	プロローグ 編集とそよ風	浜口 順子
第111巻第2号 （春号）p.24-29	シリーズ 子どもが育つ場所を訪ねて 遺愛幼稚園	上坂元 絵里 （附属幼稚園）
第111巻第2号 （春号）p.36-41	実践研究 私の保育ノートから 子どもの目線になって見えたもの	川辺 尚子 （附属幼稚園）
第111巻第2号 （春号）p.50-55	子ども学探訪 編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック 「乗物の巻」を読む	浜口 順子
第111巻第2号 （春号）p.56-61	報告 「いのちはみんなつながっている ～知識より知恵を」 本橋成一氏（映画「ナージャの村」監督）講演	菊地 知子
第111巻第2号 （春号）p.67-70	アーカイブズ 幼児の教育110年の散策 阪神淡路大震災関連の記事から —第96巻第1号（1997年1月）より—	菊地 知子
第111巻第3号 （夏号）p.2	プロローグ 子育ての季節	浜口 順子
第111巻第3号 （夏号）p.4-12	特集 問い直そう、保育の中のあたりまえのこと6 「遊ぶ」ことは「学ぶ」こと？ インタビュー 小川博久氏	<聞き手> 浜口 順子
第111巻第3号 （夏号）p.24-29	シリーズ 子どもが育つ場所を訪ねて ふれあいの家 おばちゃんち	佐藤 寛子 （附属幼稚園）

第 111 巻第 3 号 (夏号) p.36-41	実践研究 私の保育ノートから 保育の学び、教科の学び	満田 琴美
第 111 巻第 3 号 (夏号) p.51-55	子ども学探訪 編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック 明治・対象の絵雑誌からキンダーブックへ	浜口 順子
第 111 巻第 3 号 (夏号) p.67-70	アーカイブズ 幼児の教育 110 年の散策 阪神淡路大震災関連の記事から (2) —第 98 巻第 1 号 (1999 年 1 月) より—	菊地 知子
第 111 巻第 4 号 (秋号) p.2	プロローグ 待つ時間	浜口 順子
第 111 巻第 4 号 (秋号) p.4-14	特集 問い直そう、保育の中のあたりまえのこと 7 「共感」って何だろう？ インタビュー 佐伯 胖氏	<聞き手> 宮里 暁美 伊集院 理子 浜口 順子
第 111 巻第 4 号 (秋号) p.24-29	シリーズ 子どもが育つ場所を訪ねて バオバブ保育園ちいさな家	川辺 尚子 (附属幼稚園)
第 111 巻第 4 号 (秋号) p.50-55	子ども学探訪 編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック 昭和初期の幼稚園を映すテキスト	浜口 順子
第 112 巻第 1 号 (冬号) p.2	プロローグ 親を味わう	浜口 順子
第 112 巻第 1 号 (冬号) p.4-12	特集 問い直そう、保育の中のあたりまえのこと 8 「親支援」とは言うけれど インタビュー 牧野カツコ氏	<聞き手> 浜口 順子 菊地 知子
第 112 巻第 1 号 (冬号) p.24-29	シリーズ 子どもが育つ場所を訪ねて ゆうゆうのもり幼保園	宮里 暁美 (附属幼稚園)
第 112 巻第 1 号 (冬号) p.36-41	実践研究 私の保育ノートから ごちゃごちゃと遊ぶ中で	小川 知子 (附属幼稚園)
第 112 巻第 1 号 (冬号) p.49-54	子ども学探訪 編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック ツーリズムへのいざない ～地球が小さくなり始めた時代～	浜口 順子

5. 学外コミュニティへの発信等による社会貢献

1) お茶の水女子大学 ECCELL 主催 子ども学シンポジウム

(1) 開催概要

昨年度に引き続き公開シンポジウムを開催した。昨年度より名称を「子ども学シンポジウム」とし、現代社会における「子ども」の状況を多面的に見つめ、‘何が問題なのか・何ができるのか’を考えていく。平成 24 年度は計 3 回実施した。

■第 5 回子ども学シンポジウム

テーマ：「絵本の挿絵について ～絵本作家 黒井健氏をお招きして～」

日時：2012 年 6 月 23 日（土）16:45～18:00（受付 16:15～）

講演：黒井 健氏（絵本作家）

司会：菊地知子（ECCELL 講師）

参加者数：98 名

■第 6 回子ども学シンポジウム

テーマ：「これからを生きる子どもたちへ ～津守眞氏からのメッセージ～」

日時：2012 年 10 月 13 日（土）13:30～16:00（受付 13:00～）

語り手：津守 眞氏（お茶の水女子大学 名誉教授）

聴き手：高橋洋代氏（立教女学院短期大学 名誉教授）

司会：菊地知子（ECCELL 講師）

参加者数：199 名

■第 7 回子ども学シンポジウム

テーマ：「実践を通して表現の源を考える」

日時：2012 年 12 月 8 日（土）13:30～16:30（受付 13:00～）

登壇者：お茶の水女子大学 ライフ×アート プロジェクト(Half Mirror)、
木村祐子氏(スクライバー)、附属幼稚園、いずみナーサリー、
刑部育子(本学准教授)、浜口順子（本学准教授、ECCELL プロジェクトリ
ーダー）

参加者数：81 名

(2) シンポジウム参加者の声

参加者に対してアンケートを実施した。「感想」、「要望」の一部（自由記述からの抜粋）を掲載する。

<感想>

第5回子ども学シンポジウム

- ・小さい頃から慣れ親しんできた絵本がどのように描かれたのか、様々なものを垣間見ることができて、とても興味深く思いました。今はほとんど絵本に接する機会がない状態なので、改めて家に帰って読み直そうと思いました。
- ・よい本、悪い本をご自分の作品の中から具体的に示され、興味深かったです。六地蔵の話は身にしみました。そのことの「真」を見きわめようとする姿勢により、世界の見え方がかわることを実感しました。保育も同じだと思いました。
- ・絵本の挿絵を描くときに、その裏でぼう大な取材、思考、プランニング等があるのだと初めて知りました。描き方まで教えて下さり、ありがとうございました。家にある黒井先生の絵本をとり出して、もう1度じっくりと味わいたいと思います。
- ・絵本の挿絵が「生まれた」と表現なさっておられた。保育も、同じ様を表す瞬間がある。意図的に作り出すものとはちがう、結果は、その意味を探ってみると深い世界であることが多い。

第6回子ども学シンポジウム

- ・人間を作るには幼児教育、というのをあらためて確認できた事が良かったです。保育園に勤務しております。いろいろ問題はありますが、たくさんヒントをいただけて良かったです。
- ・子どもと関わる人に対しての、とても重要な印象に残るメッセージを受け取ることができ、貴重な時間をすごすことができました。保育や教育に関わる人々は芯をもつことも必要ですが、柔軟性も必要だと津守先生の生き様から感じとることができました。
- ・私は将来幼稚園教諭を目指しています。先生の“どんな子どもにも居場所をつくる”ということをお心において、今後の保育にいかしていきたいです。
- ・保育学の奥深さや学びの大切さを感じました。自分も子どもたちの幸せのために、小さな何かができるのではないかと今から行動していきます。そう思える心の学びの時間でした。
- ・保育の中で、それぞれの世代ができることがあるということが分かりました。幼児期の記憶がその人の軸となっているというお話がとても印象的でした。

第7回子ども学シンポジウム

- ・いろいろなことを考えさせられた楽しい時間でした。子どものひとつひとつの表現を大人がどう受け止めて、どうかかわるか、親としても保育者養成にかかわるものとしても、考える時間となりました。
- ・講義形式のシンポジウムも大変勉強になりますが、実際に手を動かし、対話をするワークショップもより学びが深まり、楽しいひとときを過ごすことができました。各現場で活躍する保育者、教育者の方々、お子さんのいる主婦の方など、双方向の会話ができたことが嬉しかったです。
- ・小学校の教員をしているので、幼児教育の貴重な事例を知るいい機会でした。感じたことを表現することが難しいと自分は感じていたため、本当に勉強になりました。
- ・嬉しかったです。本当に。現場の実践報告が力強かったです。
- ・スクライバーの記録の取り方が保育の実践記録でも応用できると思い、勉強になりました。また、実践発表をされた両園の子ども達の今をしっかりととらえられた資料が、とても理解しやすかったです。

<要 望>

第5回子ども学シンポジウム

- ・子どもたちにとってよりよい保育を行うためには、保育者はどうしたら良いのか。子どもも理解と保護者理解を学びたい。
- ・海外の教育実践について、小学校との連携について、興味があります。
- ・託児室があるとよい。
- ・今後も土曜日などの講義をたくさん開催してほしいと思います。

第6回子ども学シンポジウム

- ・幼保一体化についてのシンポジウムを開いてほしいです。
- ・子どもをとりまく他の職種の方（児童相談所・小児科医・保健所）も含めた人の話も聞きたい。
- ・現在、保育の中で課題とされていることを育児中の母親や父親にも周知してほしい。

第7回子ども学シンポジウム

- ・映画上映や、親子参加型のワークショップなどがあれば、参加者の広がり、お茶大 ECCELL の認知につながるのではないかと思います。

- ・実践例、発表をもっともっと伺いたく思います。
- ・子ども＋異分野の組み合わせをもっともっと知りたいです。

2) 「地域連携開催 保育フォーラム」 — 社会人講座の地域への提供—

本学内での夜間授業の提供は、社会人プログラムの中核的な活動であるが、就業時間後の授業への参加は、本学にアクセス可能なごく一部の現職保育者にしか提供できないという欠点がある。そこで ECCELL では、平成 22 年度から、札幌市と熊本市で「保育フォーラム」の地域連携開催を開始した。24 年度は、第 5 回を 2012 年 11 月 17 日（土）に札幌市で開催し、2013 年 2 月 27 日（水）には熊本市での第 6 回の開催が決定している。

（1）第 5 回お茶の水女子大学保育フォーラム 札幌開催

生涯学習部門リーダー榊原教授、ECCELL メンバー刑部准教授による講演が行われた。3 年にわたって多数の参加を得、現職保育者の学びのニーズの高さと熱意を改めて実感した。

第 5 回お茶の水女子大学保育フォーラム	
タイトル	乳幼児期の保育・教育の質向上をめざして
講演	「気になる子どもとその理解」 榊原 洋一（お茶の水女子大学大学院 教授） 「保育における記録と共有—保育的瞬間が見えるということ—」 刑部 育子（お茶の水女子大学大学院 准教授）
日時	2012 年 11 月 17 日（土）13:00-16:00
場所	学校法人 西野学園講堂（札幌市中央区南 5 条西 1 1 丁目）
共催	札幌市民間保育園運営研究会、幼児のための新世紀学習会
後援	一般社団法人札幌市私立保育園連盟、札幌市私立幼稚園連合会、 学校法人西野学園
参加者	92 名（現職保育士、幼稚園教諭、保育研究者）

（2）第 6 回お茶の水女子大学保育フォーラム 熊本開催

生涯学習部門リーダー榊原教授、菊地講師の講演が予定されている。

第6回お茶の水女子大学保育フォーラム	
タイトル	乳幼児期の保育・教育の質向上をめざして
講演	「気になる子どもとその理解」 榊原 洋一（お茶の水女子大学大学院 教授） 「今こそ自分にも子どもにもあたたかい保育・子育てをしよう」 菊地 知子（お茶の水女子大学 講師）
日時	2013年2月27日（水）13:00-16:00
場所	KKR ホテル熊本（熊本市千葉城町3-31）
共催	社団法人 熊本県保育協会
参加者	募集中

3) 発行物

(1) 大学コミュニティにおける乳児保育の場から生成される重層的カリキュラム開発
 (平成21～23年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(C))報告書

「大学の中で赤ちゃんが笑うII」 お茶の水女子大学 ECCELL・いずみナーサリー

発行部数：400+300

(2) お茶大子ども学ブックレットVol.1 第1回ECCELL子ども学シンポジウム2011.3.13

「子育て力の危機と創生～エンパワーメントの視点から～」 発行部数：300+300

(3) お茶大子ども学ブックレットVol.2 第2回ECCELL子ども学シンポジウム2011.11.19

「いのちはみんなつながっている～知識より知恵を～」 (発行予定)

(4) お茶大子ども学ブックレットVol.3 第3回ECCELL子ども学シンポジウム2011.12.13

「現代の保育制度変革の中で起こっていること」 (発行予定)

4) 「幼児の教育」WEB公開(お茶の水女子大学教育研究成果コレクションTEA POT)

2008年度から「幼児の教育」誌のバックナンバーが、附属図書館による本学の研究発掘と公開を目的としたリポジトリに収録され、インターネット公開されている。これまでの総アクセス数は、226,536件にのぼる。1901年『婦人と子ども』という誌名で、幼児教育研究組織フレール会(後に日本幼稚園協会と改称)の機関誌として発刊された第1号以来のものが、3年前のものまで全ページ公開され、貴重な研究史料として評価されている。国内のみならず広く世界から閲覧・ダウンロードされ、2012年は、2011年より約2倍にアクセス数に伸びている。(図書

館によると、下記の数値のうち国別データの中で国がN/Aとなっているのは、どの国か不明のもの。
また、Googleやmsn等の検索エンジンの収集ソフトウェアのアクセス件数を完全には削除できていないため、アメリカからのアクセス件数が、どうしても多くなる。）

2012年ダウンロード件数 106,061 (2011年 52,698)

(国別 閲覧件数・ダウンロード件数)

Japan	31438	50392
N/A	34309	28517
United States	18216	21158
China	3679	3449
Australia	542	910
Canada	365	501
Taiwan	185	203
Korea, Republic of	111	163
United Kingdom	108	133
Germany	93	123
Hong Kong	240	94
Ukraine	77	73
France	25	35
Netherlands	347	23
Indonesia	9	20
Brazil	5	19
Austria	11	17
Singapore	2	17
Mexico	10	15
Russian Federation	3	14

5) 文京区子育てフェスティバルへの参加

平成24年11月23日、文京区主催子育てフェスティバルにECCELLとして「朗読会」を企画した(時間:12:00~14:00、場所:文京区シビックセンター地下2階 区民ひろば)。「子育てほんとうに大切なことって? ~日本幼児教育の父・倉橋惣三と子どもたち~」と題して、倉橋惣三の略歴と子ども学の概要、お茶の水女子大学(東京女子高等師範学校)との関係等についての説明をパワーポイントで示しつつ、倉橋著『育ての心』(フレーベル館)からいくつかのフレーズを朗読紹介した(約20分の内容を、3回)。会場は、子育てフェスティバルに来た親子連れや、地下鉄とシビックセンターとの間を往来する一般の人たちが立ち止まって自由に過ごしてもらえる場所であったので、参加人数を確定することはむずかしい。しかし全体に好評で、文京区の担当者からは、今年3年目開催のフェスティバルとしても目新しい企画で来年度の参加もありうるという感触を得た。定例化することで社会貢献の実績を重ねることを検討したい。寺本圭佑氏によるBGM(アイリッシュハーブ演奏)が集客・伝達効果を一層引き

立てた。この企画には、文京区内の私立大和郷幼稚園の向山陽子先生、フレーベル館のご後援をいただいた。

6. 企画・運営・検討に要した会議

事業が3年目を迎え、教育実践や研究発表だけでなく、公開イベントや他機関・他事業との連携など事業活動が多岐にわたるようになった。そこで、会議の趣旨を再確認し、24年度より新たにコア会議を設置した。また、学会発表や成果報告に向けての研究会を定期的に開催した。

1) ECCELL 運営会議

①12/05/21 (月) ②12/09/20 (木)

2) ECCELL 全体ミーティング

①12/04/25 (水) ②12/05/28 (月) ③12/06/25 (月) ④12/09/10 (月) ⑤12/10/29 (月)
⑥12/11/26 (月) ⑦12/12/17 (月) ⑧13/01/28 (月) ⑨13/03 (未定)

3) ECCELL コア会議

①12/04/02 (月) ②12/04/19 (木) ③12/05/10 (木) ④12/05/21 (木) ⑤12/06/13 (水)
⑥12/06/28 (木) ⑦12/07/12 (木) ⑧12/08/08 (水) ⑨12/09/10 (月) ⑩12/09/27 (木)
⑪12/10/11 (木) ⑫12/11/05 (月) ⑬12/11/26 (月) ⑭13/01/07 (月)

4) ECCELL 研究会

①12/10/25 (木) ②12/11/15 (木) ③12/12/13 (木) ④13/01/07 (月)

第3章 まとめと課題

欧米主要国では、乳幼児教育へのテコ入れによる経済効果を期して、20世紀末からECEC(Early childhood education and care)の質の向上を国家施策とし、0歳児から成人までの長期的視野に立った生涯教育を推進している。子ども・子育て新システムは廃案になったが、保育改革の名のもとに乳幼児教育(保育)施設の最低基準を低め、先進国中もっともリカレント学生率の少ない大学教育(つまり、高校出たての人ばかりの高等教育)を進めている我が国の中で、「乳幼児教育」と「生涯学習」の両方をキーワードに含んでいる私たちのプロジェクトはその流れに抗い、「子ども」を幸せにすることと、大人が学び続けることが矛盾しない社会を構想している。